月報

古代史ニュース

2024.2.29
N0.332

古 代 史 教 養 講 座　創立 1995 年

メール・アドレス
kys4s@jcom.zaq.ne.jp

3月2日ゼミは開催します

縄文・弥生の問題点

—3 月 2 日ゼミ紹介文：飯田　眞理会員記—

【はじめに】日本列島の歴史を知るためには、やはり縄文時代がどのような時代だったのかを知ることが重要である。今回ほんの少しであるが、それなりの学習をすることができた。また弥生時代についても、その開始年代のＢＣ10 世紀説は矛盾だらけの誤りで、従来説のＢＣ５世紀が正しいことを確信することができた。また水田稲作などの弥生文化がどこから来たかについても、多方面から学習した。筆者の説を含めて、項目ごとに学習した結果を述べる。

1．縄文時代の開始は本当に 16000 年程度前なのか？

1999 年、大平山元Ⅰ遺跡の土器付着炭化物の C14 年代測定の較正年代が、15,500～16,500 年前とされた。これにより、縄文時代の開始がそれまでから 4000 年ほどさかのぼることになった。しかし、筆者はこれについて疑問をもっている。まず、測定の炭素年代は 13800 年 BP である。較正曲線により 15,500～16,500 年前とされるが、較正曲線がどの程度信頼できるのかわからない。さらに測定資料の土器付着炭化物の年代は木材燃料の年代で土器の年代ではないことである。

それまでの最古の土器は、長崎県泉福寺洞窟出土の豆粒文土器の１万 3000 年前～1 万 2000 年前とされてきた。この年代を較正しても、大平山元Ⅰ遺跡のほうが少し古いようになるが、それを「**わが国最古の土器**」というのには問題がある。大平山元Ⅰ遺跡は、青森県の最北端地域の外ヶ浜である。この土器を作った人々は、現代の大多数の日本人の先祖（倭人）が作ったのではない。

亀ヶ岡文化時代の人々と同様に、滅ぼされた「東北蝦夷」の先祖たちであることを、しっかりと認識すべきである。

2．縄文文化はなぜ東高西低なのか？

縄文時代の北海道を除いて推定される人口は、時期によって多少異なるが、圧倒的に列島の東に偏っている。その理由として、「サケ。マス仮説」や「西日本ではドングリなどの堅果類が少なかった。」などの説があったが、いずれもほぼ否定されている。筆者はその理由としては、やはり火山大噴火であると考える。約２万５千年前の姶良火山爆発と約 7000 年前の鬼界カルデラの爆発により、西日本の植生が大打撃を受けたことが、西日本が住みにくい地域になったと考えられる。

3．縄文時代の列島は閉鎖社会ではなかった！

近年になるまで縄文時代の列島と大陸との交流にはほとんど目がむけられることがなく、列島が閉鎖社会であったということが通説であった。しかし、近年に次々と大陸系の遺物が発見されるようになっている。鳥浜貝塚からは、多くの大陸に由来する食用植物の花粉や河姆渡遺跡の道具類と同じものが出土している。玦ケツ状耳飾りなどの玉製品も、大阪府や福井県など全国各地で出土している。さらに、東北地方には、有孔石斧、青銅刀、石刀、漆塗り彩文土器、三足土器が出土している。列島の西南部と東北部において、別々の大陸との交流があったことになる。

4.「餅なし正月」の地域とは？

民俗学者の坪井洋文氏は、「餅なし正月」について論文を書いている。（「森浩一編『日本の古代４縄文・弥生の生活』」中央公論社）筆者は、興味を引かれたので紹介する。坪井氏は「餅なし正月」の地域における「餅なし」のいわれを調べた。それによると、餅を食べようとすると、「不幸が見舞い、一年の幸福が破壊されてしまう」というのである。家

族、一族、ムラといった集団単位で伝承しているとのことである。「餅なし正月」の集団が儀礼食としている素材のすべてが、畑作物、特に焼畑での伝統的作物という点が問題である。水田稲作農耕とは異質の生活体系を担っていたことを仮定することが出来て、焼畑農耕民が大正月を受容する過程において発生せしめた禁忌であったとのことである。

★筆者はこの論文から、縄文系の焼畑農耕民の住民が水田稲作を拒否したことが「餅なし正月」となったと考えたが、確信はできていない。

５．土偶の正体がわかった！

土偶の正体は「植物の精霊」であったことについては、既に一昨年 Zoom ゼミで、「竹倉史人『土偶を読む』晶文社」を元にして、岡安会員が発表されているので省略する。

６．弥生開始年代について

2003 年国立歴史民俗博物館は、土器付着炭化物のＣ14.年代則定により、弥生時代の開始年代がそれまでより 500 年さかのぼるＢＣ10 世紀になることを発表した。これに対して、当初は多くの考古学者から批判がなされた。甕棺や青銅器の編年が歴博説を元にすると考えられないことであった。九州大学グループは、これを受けて同じ時代の人骨などを資料としてＣ14.年代測定を行い、従来説にほぼ合致することを発表した。しかしその後、無批判に受け入れる方々が増えて、現在では定説のようになりつつある。従来説が正しいとする立場の筆者については、嘆かわしいことである。最大の問題は、歴博が（意図的に？）土器付着炭化物を資料として用いている点である。土器付着炭化物は土器の年代でなく燃料木材の年代であり、10%以上古くなることが西田茂氏により明らかになっている。さらに海洋リザーブ効果により古くなることが、田中良之氏らにより実証されている。考古学でも批判が多い。遼寧式銅剣の編年や前漢鏡の中国と北部九州の交差年代法からも、歴博説を成り立たないことが、武末純一氏や高倉洋彰氏によって示されている。

7. 弥生文化はどこからもたらされたか

弥生文化は水田稲作と金属器の使用をその始まりとする。金属器は朝鮮半島から伝わったことは間違いない。しかし稲作の渡来ルートとしては、朝鮮半島経由ルート説の他に、長江流域からの直接渡来したとの説も有力である。また、高床式住居、鵜飼、チマキ、ナレズシ、歌垣、文身などの文化は華中以南の文化であり、長江流域などから直接伝わったと考えられる。中国南部やインドシナ北部の少数民族は、現在も弥生文化と同じ文化を持っている。筆者は弥生時代には朝鮮半島からだけではなく、長江流域からもかなりの人々が渡来したことは間違いないと考える。太宰府天満宮に残る『翰苑の魏略逸文』には、倭人の出自について「其俗男子皆黥而文 聞其旧語 **自謂太伯之後** 」と記しているからである。太伯伝説は史実とは考え難いが、倭人が呉の地から列島に渡来したことは真実であろう。

8. 太伯伝説について

★前章で述べた「倭人が自ら太伯の末裔と語ったこと」は、晋書、梁書、北史にも記されている。実は、これらの記事について、日本の中世以降に大論争になっていたのである。「上野武『日本の古代１・倭人の起源と呉の太伯伝説』」を要約する。

北畠親房は「大日本は神の国なり・・異朝の書に『日本は呉太伯の後也と云』といえり。返々あたらぬことなり。昔日本は三韓と同種也と云事のありし。」と書いている。一方、中世の禅僧中厳円月は『日本書』を著した。この書物は現存していないが、江戸時代の林羅山は、「円月の日本書が焚書されたのは、太伯の子孫が九州に来たことが天孫降臨としたからであろう」と評した。藤原貞幹や鶴嶺戊申らも肯定的に言及している。これに対して国学者からは、「皇祖太伯説は日本を夷狄と賤しめる・・」と批判した。本居宣長は貞幹を「狂人」扱いした。明治時代の那珂通世は、太伯説とは「彼を中華と尊み、我（皇国日本）を東夷と称するほどなれば・・いとも哀れな見識なり。」と書いている。皇祖太伯説を唱えた円月や林羅山を「国賊」と呼ぶ学者さえ現われた。

★以上のことからわかるように、歴史学（説）は、その人の歴史観や国家観が元になって、それは現在でも同じなのである。

9.「魏志倭人伝」以前の中国史料からみた倭人の源郷

魏志倭人伝では、倭人の地は朝鮮半島南岸部と北部九州であることがわかる。ところが、それ以前の史書からは倭人の居住地は列島ではなく、東シナ海から黄海周辺（山東半島～韓半島西海岸）であるように記されているのである。

①前３世紀末～2 世紀初めのころの地理書「**山海経**」には「**蓋國在鉅燕南倭北倭屬燕**」と記されている。倭は蓋國の南で燕に属しているということだが、日本列島でないことは間違いない。
②『論衡』**王充**（AD28~会稽郡上虞の出身）「周時天下太平倭人來獻鬯草」「成王時越裳獻雉倭人貢鬯」倭と越が並列して記されているので、この倭も日本列島人ではなく越に近いところと考えられる。
③次は正史の『**漢書・地理志**』である。「**樂浪海中有倭人**・・以歳時來獻見云」朝貢したのは北部九州の倭人であることは間違いないが、「樂浪海中」が北部九州とは考えられない。著者の班固には、倭の地は黄海の沿岸地域であるとの認識があった可能性がある。
④その他、後漢書の「倭の奴國・・**倭國の極南界なり**・・」、倭人磚の「有倭人以時盟不」後漢書・烏桓鮮卑列伝の「聞倭人善網捕、於是東擊倭人國」からも、倭人の居住地が「樂浪海中」の黄海沿岸地であることがわかる。
★江上浪夫氏は「倭は、黄海あるいはそれより以南の東シナ海の沿岸にいたと考えざるを得ない。」「**倭人の源郷**は、たぶん**長江下流域の江南の地方、あるいは河口にちかい沿岸の島嶼**にあった。」と書いている。　以上。

ゼミ会場と時間13:15～16:50

1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分

気候変動その２（氷期と間氷期は繰り返される）

—磐城　妙三郎会員記—

古代史ニュース No.324 号で「気候変動（Climate Change)、地球温暖化について」を投稿しました。今回はその続編です。前回の投稿で「ミランコビッチサイクル」について簡単に紹介しました。ミルティン・ミランコビッチ（1879～1958）はセルビアの気象学者で 1941 年に次のような仮説を打ち立てた。「地球の公転軌道や自転軸の変動に伴う、太陽からの日射量の変動が氷河期の起因である。」この理論に基づき北半球高緯度域での過去 60 万年にわたって日射量を計算した結果、入射エネルギーが顕著に低下した時期が何度もあり、その時期が氷期にあたると結論づけた。ただし氷期も間氷期も平均すると入射エネルギーの変動は少ない。この研究成果が発表されたのは第 2 次世界大戦の真っ只中であり、科学界でも気に留められることはなかった。ミランコビッチの没後 10 年以上たった 1969 年に英語に翻訳されようやく陽の目を見ることになったが、この仮説が証明されるまでは更なる時間が必要であった。古気候学の幕開となる。
有孔虫という海に生息する動物プランクトンは炭酸カルシウムの殻を作っている。その死骸が海底に堆積して化石となる。海底に層状に堆積した有孔虫の化石を調べることによって、炭酸カルシュームに含まれる酸素同位体比（説明は省略）と放射性炭素年代（説明は省略）を求めて有孔虫が生きていた時の海水温と年代を探る研究が進められていた。チェザーレ・エミリアーニ（1922～1995）はイタリア人の古海洋学・古気候学の開拓者で 1955 年に「海底堆積物コア中の有孔虫の海洋酸素同位体比ステージ」の論文を発表した。ジョン・インブリー（1925～2016）はアメリカ人の古海洋学者で 1976 年に「海底堆積物コアの酸素同位体比のスペクトル解析」の論文によってミランコビッチサイクルの氷期と間氷期の気候変動サイクルと一致することがほぼ証明された。ミランコビッチの没後約 30 年が経過していた。エミリアーニが海底堆積物コア中の有孔虫の海洋酸素同位体比を研究してた頃、グリーンランドで採取されていた氷床コアに目を付けたデンマーク人の古気候学者ウィリ・ダンスガード（1922～2011）がいた。ダンスガードはグリーンランド島の各地における平均温度と降雪中の酸素同位体比が比例関係にあることをつきとめていた。1969 年に 1400m 近い氷床コアの酸素同位体比と放射線炭素年代を調べることによって、エミリアーニの実験と同様な、氷期と間氷期の気候変動サイクルを発見したが、多くの古気象学者はその結果を疑問視した。スイス人気候学者のハンズ・オシュガー（1927～1998）らも加わり 1982 年と 1989 年さらに 1992 年と掘削地点を全島に広げ分析した結果、過去 11 万年にわたる気候変動記録を得ることに成功した。

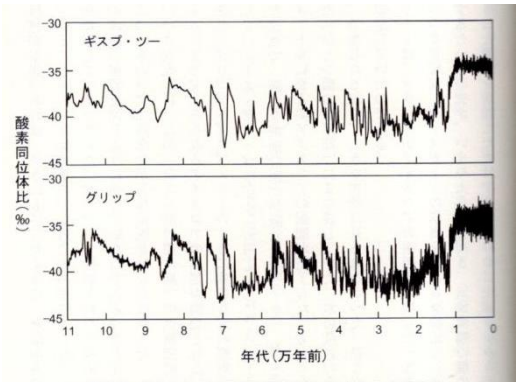

図9-7　グリーンランド中央部「サミット」におけるギスプ・ツー(上)とグリップ(下)の酸素同位体比記録．年代はそれぞれのアイスコアで独自に決定されているため，わずかに異なっている．Grootes *et al.*(1993)を改変．

上図はグリーンランド島中央部のギスプ・ツーとグリップで採掘された氷床コアの酸素同位体比の記録である。右端の約１万年間は安定した気候であるのに対して１万年前から 11 万年前までは寒冷期にあたるが数多くの短期の温暖期を繰り返している。ダンスガード・オシュガー・イベントと呼ばれている。本稿では氷期と間氷期は地球の公転軌道と自転軸の変動に起因することを述べたが、次回は世界中の常識となっているカーボンニュートラル政策の背景と最近注目度を増している地球を覆う雲による日傘効果に基づく寒冷化現象について取り上げてみたい。(つづく)

橿原考古学研究所公開講演会 「桜井茶臼山古墳」聴講記録—増田　修作会員記—

2023 年 10 月 8 日（日）頭記講演会が開催され、参加の機会を得たので聴講した内容及び個人としての意見を投稿する。

橿原考古学研究所の主宰者としての講演骨子は次の通り。

1. 桜井茶臼山古墳は、古墳が築造された 3 世紀当時、「各地の豪族が緩やかに連合した脆弱な政治的結合の上に立つヤマト王権」という従来の学説に対して、この頃すでに絶対的ともいえる王権が確立していたことを証明する画期的な遺構であることが今回の古墳再調査によって確認された。

２．そのことは特に①古墳の石室の構造、②出土した大量（１０３面以上）の鏡によく表されている。

①桜井茶臼山古墳は初期前方後円墳の代表的事例であって、特に石室の❶朱で覆われた木棺、石室、床、❷高い強度を維持する持ち送り壁、❸巨大（１．５トン以上）天井石❹丸太垣を廻らした方形壇などから桜井茶臼山系統というべき新しい石室構造パターンがこの頃開発されたと評価できる。

②出土した鏡は過去に例を見ない１０３面以上という量および❶神獣鏡、内行花文鏡、鼉龍鏡などを網羅する中国鏡、❷三角縁神獣鏡、❸国内倣製鏡がすべて備わっているという質的側面からまさに王陵であることを物語る画期的なものと評価できる。

私の個人的感想は次の通りです。

１．橿原考古学研究所の公開講演会なのでやむをえないとは思いますが、すべてをヤマト王権に集約しようとする結論まずありきが感じられてやや素直に聞けない思いです。

２．例えば出土した鏡ですが、これまで最多とされてきた有田平原古墳出土の鏡との対比、評価などがあるかと思っていたのですが平原のひの字もありませんでした。平原からもまさに中国鏡、大型内行花文鏡、倣製鏡が出土しているわけですから、科学者であれば両者をきっちりと比較評価すべきで、そのうえで桜井茶臼山古墳の価値を述べるべきと思いました。

３．桜井茶臼山古墳の築造は３世紀末、これに先行する箸墓古墳は３世紀半ばと考えられていますが、大和周辺地域からの出土品などから考えてこの３世紀頃に大和王権が成立していたとは考えにくい。従って今回の公開講演会の開催の前提には基本的な疑問が残る。

４．出土した鏡は１０３面以上となっていますが、完成した鏡として復元できるものは１面もなく、というよりも粉々の鏡の破片の集まりというべきものでおそらく一番大きい物でも１０ｃｍ程度だったようです。平原との比較をしなかったのもそれもあるのかもしれません。その粉々の鏡の欠片から１０３面の鏡を復元した努力と技術力は大変なものとは思いますが。

５．古墳石室の構造については大変面白く思いました。私は始めて聞いたので評価は難しいですが他の古墳についても確認してみたいと思いました。　以上。

次回４月６日ゼミ･テーマ

古気候学の概要—磐城　妙三郎会員